

# メルヘンから童話への過程

## — 中村草田男『ビーバーの星』論 —

### Creative Process from Märchen to Fairy Tale

— A Fairy Tale “A Star is named Beaver” written by Kusatao Nakamura —

中 島 賢 介\*

#### Abstract

A Haiku Poet Kusatao Nakamura (1901-1983) rewrote the märchen (German folk-tale) “The Beaver” in 1949 and published it as the fairy tale “The star named Beaver” in 1977. This paper describes the process to the fairy tale from the marchen.

It is thought that this fairy tale and the novel “The Last of the Mohicans” (1826) which is written by J・F・Cooper have common features in respect of the composition, and the relation of characters. From the viewpoint of juvenile literature, it is seen that there are contents and expressions beyond understanding of children in this fairy tale. However, it is clear that it is work which should be handed down from generation to generation.

キーワード：児童文学／メルヘン／童話／中村草田男

#### I 問題の所在

1977（昭和 52）年 10 月に出版された中村草田男のメルヘン集『風船の使者』は、その年度の芸術選奨文部大臣賞を受賞した。しかし、このメルヘン集の出版には複雑な経緯がある。まず、草田男は第二次戦後次々と作品を発表したが、1949（昭和 24）年『文芸』に『海狸（ビーバー）』を発表して以来、メルヘン創作を中断している。ところが、その後 1969（昭和 44）年 10 月に童話『ビーバーの星』が出版され、続いて『海狸』を含む全メルヘンを集めた『風船の使者』が出版されたのである。なぜメルヘン『海狸』は評価されたにも関わらず、童話『ビーバーの星』は評価されなかったのか。また、メルヘン集の評価によって、『ビーバーの星』が再評価されなかったのはなぜか。

今回は、このメルヘンから童話へ、また童話からメルヘンへと再発表された経緯を明らかにする

と同時に、創作の背景、作品内容を分析し、童話『ビーバーの星』が児童文学としてどのように位置づけられるかを明確にしたい。

#### II 『海狸』と『ビーバーの星』の比較

資料 1 の対照表を見る限りにおいて、表現においては、旧字体を始め表現そのものに大幅な変更が加えられていることが分かる。一方、内容としては、「宿命」に関する箇所を、年少読者に限定した語りかけの部分を除き、何ら変更された形跡はない。よって、メルヘンとして上梓された段階では、子どもを含んだ読者一般を対象にしているが、童話の段階では、明らかに読者を子どもに特定し、可能な限り表現を理解しやすいよう工夫して発表していることが分かる。

続いて資料 2 は、『ビーバーの星』においてルビが振られている語の一覧である。この振り方からして、実際に文章そのものが理解できるかどうかは後述するとして、童話化の段階で、小学校中学年から読めるよう配慮されていることが分か

\* Kensuke NAKAJIMA

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科  
日本語表現法

る。

なお、『海狸』は、初出は文芸雑誌『文芸』にて発表されており、『ビーバーの星』は、福音館書店から出版され、挿絵はすべて彫刻家でもある佐藤忠良が担当している。



### Ⅲ 童話の内容と分析

「『爺ちゃん、これむずかしいよ。』読み始めた『ビーバーの星』を、孫は私に読んでくれと言う。そんなことは無いだろうにと、説明しながら音読してゆくと、成程これは小学二年生にはほんとうに難解だろうと思いつつ、遂に音読が黙読に落ちて行った。」<sup>1</sup> これは、ある俳人が「大人にも奨めたい」と題した書評の冒頭部分である。この内容に象徴されるように、『海狸』から表現がかなり改められたにも関わらず、それでもなお、豊富な語彙で語られる世界は子どもには難解であるとの印象は否めない。ルビの振り方からして、小学校中学年から高学年以上の読者を対象としたと考えられるが、絵本サイズの装丁や表紙の主人公の絵などからして、先ほどの俳人が孫に行ったように、大人が子どもに読み聞かせする物語であるといえることができる。

#### ① あらすじ

その内容とはアメリカ北方の森林地帯を舞台にした、ある「アメリカ・インディアン」<sup>2</sup>の種族の物語である。その種族では、新しく生まれた子どもを森林に埋め、三日三晩放置する。その際、一番最初にその子の前を横切った動物が「守護神」になる。その後、成長した後再び森林に入り、放置された所に行くと、その守護神に出会うことができる。このように、一人ひとりの人間にはそれぞれ生涯をともしにする動物がいて、必

要に応じてその動物の力を借りることができる。このような人間と動物の関係を「宿命」という。

ある年、森林地帯が凶作の年を迎え、戦々恐々としていた時に、共同の食糧倉と個人所有の倉が何者かによって食い荒らされるといった事態が起こる。そのやり口が人間業とは思えなかったことから、人々は「神の手」によって災いが起こっていると恐れた。ところが、槍の名手である青年オトラップだけは、何者かの手によって行われていると考え、夜な夜な人知れず集落を見回っていた。何度見回っても、見回ったはずの倉が被害に遭っている。次第にオトラップに焦りと苛立ちが見られるようになったとき、一匹のビーバーが現れて彼を導く。その先に見えたのは、人間ではなく一頭のトナカイであった。そのトナカイこそ食料倉を荒らした犯人であることを悟り、戦いを挑んだが、トナカイは身を翻して逃げてしまった。オトラップはついにその犯人がゲプタという男の化身であることを突き止める。ゲプタも、槍の名手であり、人々から聖者だと崇められていた人物であった。人々は彼の発言や行動を立派であると賞賛したが、内実は夜な夜なトナカイに身を化して悪行を繰り返していたのである。

オトラップは、この事実を秘密にして自分一人でゲプタに戦いを挑むことを決め、ビーバーの先導によりトナカイを見つけては戦いを続けた。オトラップはビーバーにゲプタの化身を食い止めることができなかと尋ねたが、ビーバーは、その方法はゲプタとトナカイだけが知っていることだが、ただ一つ有効な方法があると答える。それは、ゲプタのトーテムポールに糞尿をかけて汚してしまうというものであった。だが、オトラップはトーテムポールに掲げられている神への畏敬から断念せざるを得なかった。残された方法は、「動物ゲプタ」を減ぼすことによって「人間ゲプタ」を減ぼすことのみであった。すると今度は、ビーバーは川の氷が解け始めているため、その上で戦えばトナカイが逃げ場所を失う、そのすきにオトラップが槍で打ち倒すという方法を提案した。そしてその作戦は実行に移される。

オトラップは、氷上での壮絶な戦いの末トナカイを倒したが、川に流されていくトナカイの傍らに流されていくビーバーの姿を見た。オトラップ

はビーバーの犠牲によって勝利することができ、人々から称賛されたものの、日に日に体が衰弱していく。そして晩年長老に事の経緯を話し、死去して天に上り、小さな星となる。その星の名前はビーバーともオトラップとも呼ばれるようになった。

## ② 物語の分析

先述したとおり、メルヘン『海狸』と童話『ビーバーの星』とは、表現及び対象となる読者こそ違えど内容的には何ら変更が加えられていないため、分析内容にも表記面以外は何ら相違ないことを断っておく。

由良（1984）は、物語が無時間的な空間設定のなかでの出来事であることから、C・G・ユングの「神話原型論」による分析で読み取ること、草田男の戦争体験に根ざしている現実面から読み取ることが可能であると指摘している。その前者を「無時間的原型的想像力のテーマ」、後者を「人間主義的現実のテーマ」と考える二分法を設定した上で、自らの解釈を述べている。<sup>3</sup>

特に原型的想像力のテーマに関しては、「主人公オトラップ」、「対立者ゲプタ」、「馴鹿」（悪をなすもの、森の破壊者）、「海狸」（精神の原型）、「解氷の洪水」（巨大な混沌のエネルギー）、「再生」（真賢者の誕生）、「正名」（呪術的象徴法）、「星」（宿命）の果たす役割と、それぞれが象徴とするものが論じられている。

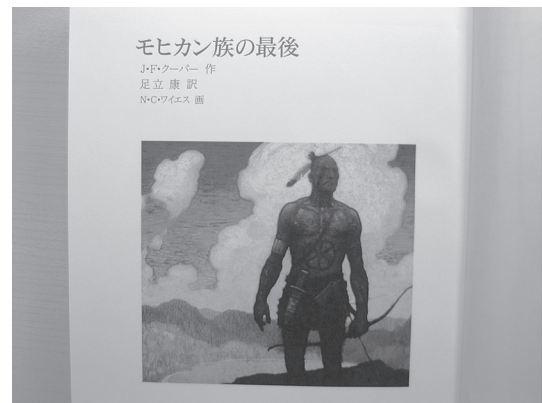
また、菊池（1970）は、次のように述べている。

一巻の中に内包されている高い詩精神が、轟々と胸に圧しかぶさってくるのは当然としても、何故か過去に於けるあの理不尽な戦争への反省やら、戦後の突き崩された社会相への批判などを暗示するものが胸に迫って来るようである。何と言っても平和を希求してやまない草田男先生の理念の結晶と言う外はない。（中略）頂点に達した怒りを晴らさんとする最後の手段を執行する場合でも、更に熟慮を払うべきことを訓えている。太平洋戦争の発端に、真珠湾の寝首を搔いた日本のやり方が苦く蘇ってくるようである。<sup>4</sup>

菊池はこの自己流の解釈に対して草田男に陳謝の言葉を述べているが、この引用文は由良の「人間主義的現実のテーマ」に関する論考を補完する

役割を果たしているといえる。読者がこの物語から戦争体験を連想することは突飛な発想ではない。なぜなら、『風船の使者』で『海狸』が『一雲雀』や『石臼を廻す船歌』などとともに戦後創作された作品群を収められていることもあるが、新聞の書評において、複数の批評家が戦争を連想しているからである。<sup>5</sup> 戦争経験という同時代的理解の可能な人々にとっては、この作品が戦争を想起させるものであることが分かる。

ところで、この物語と同様北米ネイティブアメリカンを扱った作品に、J・F・クーパーの『モヒカン族の最後』である。この作品と『ビーバーの星』とはいくつかの共通点がある。<sup>6</sup>



まずは、舞台と登場人物の設定である。いわゆる西部劇物では、開拓民とネイティブアメリカンとの戦いあるいは開拓民同士の物語が主流であるが、『モヒカン族の最後』はイギリスとフランスとの植民地争いの構図はとっているものの、最後に戦うのはあくまでもネイティブアメリカン同士である。西村ら（2002）は、この作品には「高貴なる野蛮人」、「無垢なる人々」というロマン主義的イメージがあり、西部劇によく見られる「地に飢えた」、「動物的な」イメージとは対照的なものがあるとしている。<sup>7</sup> さらに、人物関係にも類似性を見出すことができる。両者には、同じネイティブアメリカンでもあくまでも自分たちの品位を保とうとする者もいれば、なりふり構わず身勝手に振舞う者もいる。『モヒカン族の最後』では、前者がアンカスやチンガチグックであり、後者はマグアとして描かれており、『ビーバーの星』では前者がオトラップであり、後者はゲプタである。前者と後者がその姿勢から互いに戦わざるを得な



い状況を迎える。その戦いは、後々民族としての誇りを示す物語として語り継がれることになるという点でも共通している。

次に、ビーバーやトーテムポールの果たす役割である。

#### ① ビーバー

『モヒカン族の最後』におけるビーバーについての箇所を引用する。

かしこいビーヴァーたちが、せっせと木を切りたおした池のほとりは広場のようになっていた(中略)

自分が今くわわっている作戦について、ぺらぺらとしゃべりまくったあと、ひどくまわりくどい気をまわしたいいかたで、有名なビーヴァーたちの知恵を、すこし、同族の自分にもわけてくれないかとたのんだ。<sup>8</sup>

これは、狡猾で残忍なマグアが同族の仲間に取り入る場面だが、ここではビーバーが賢く知恵に長けた動物であることが描かれている。このビーバーは実は毛皮でありモヒカン族のチンガグックであることが明らかになるわけだが、こうした知恵ある動物の象徴としてビーバーが『ビーバーの星』に継承されているといってもよい。

#### ② トーテムポール

そして、トーテムポールについての箇所を引用する。

トーテム・ポールは、色をぬった小さな棒にすぎないが、インディアンたちは、そこに魔力がやどっていると信じているので、それにふれている者は命をうばわれることはなかった。(中略)

見ると、若者は身を守ってくれるトーテム・ポールに片手をかけ、さすがに、はげしくあらゐ息をついていたが、逃げまわって苦しそうなようすはできるかぎり見せまいとしていた。昔からの神聖な習慣で、彼の身の安全は、とりあえずトーテム・ポールに守られていた。<sup>9</sup>

トーテムポールの役割については、多くの文化人類学者が論じているが、ここでは民族の祖先や神といった崇めるべき対象として描かれている。この禁忌の概念が『ビーバーの星』にもあるということが分かる。

## Ⅳ 児童文学作品としての評価

児童文学研究における重要な視点の一つに、読者としての子ども、いわゆる読書論がある。西田(1980)は、成人である作家がどう表現しているかということよりも、子どもである読者がその表現をどう理解し、どういうイメージを描いたかという点が問題になると指摘している。<sup>10</sup> 菊池(1970)は、「大人にも褒めたい」としているが、事実小学校低学年の子どもには「難しい」と感じた。これは率直な感想であり、読者の偽らざる声である。

この声に従って、物語の表現に着目してみた。先述した通り、資料2を見ると童話の中には、61ページの文中に夥しい数のルビが振られている。漢字表現からすると、小学校中学年から読めるような体裁には整えられているものの、子どもの想像力に任せるには語彙の面で明らかに逸脱した表現が見られる。

文体も説明箇所が多く、劇的な場面展開が繰り返されることはないという点で、子どもを対象とした作品としては、完成度に疑問があると見方も成り立つ。

さらに、試験の不正疑惑や裁判の証拠提出など、子どもの生活からは想定できない場面が設定されている。これらを総合して考えると、瀬田のいう「年少の読者たちにも、よくわかり、したがってまた結局は、作者の訴えたいところも、それとすらずとも納得せられるだろう」という考え方は、およそ見当外れであると思われる。<sup>11</sup> また、作品と子どもの直接的な交わりを求めるよりも、むしろ読み聞かせる大人を媒介として、それを補いながら読むことを要請しなければならないものに仕上がっているというべきであろう。

## Ⅴ 草田男の創作過程と児童文学の流れ

草田男のメルヘン創作について、『風船の使者』の中に収録されている作品を年代別に並べると資料3のようになる。

彼のメルヘン創作は学生時代の小品「菊ばたけ」の頃から始まるが、本格的に作品が発表されたのは、その後「ホトトギス」同人として参加していた散文創作グループ「山会」においてである。「山会」の創始者は正岡子規だが、子規の死後虚子へ

と継承され、昭和初期から草田男もこの会に積極的に参加していた。この山会での発表を契機としていくつかの雑誌からメルヘン創作を依頼され、戦前において、すでにいくつかの雑誌に作品を発表していた。だが、戦時、思想統制の波によって創作活動が滞る。<sup>12</sup>

まず、戦中戦後における俳人草田男の状況とはいかなるものであったかを述べる。

伝統俳句を継承する「ホトギス」の中にいながら、新興俳句作家たちとも交流があった草田男は、当時政府と緊密な立場にあった小野撫子から糾弾され、虚子に事実上の謹慎処分を下され、創作活動が滞るといった事態を迎える。この件については、『新興俳句弾圧事件』その他の論究がある。戦後、草田男自身も俳壇における俳人らの戦争責任を追及する姿勢をとるが、まさしくこの辛酸を舐めた経験が彼にそうさせたと考えられる。この事態によって、草田男は何らの反省もなく180度転換した体制に追従する俳人たちの存在を目の当たりにしたと述べている。

そして、戦後「少国民の友」他数誌からの依頼によって再びメルヘンを書き始める。だが、草田男は1949（昭和24）年の『海狸』を境に、メルヘンの発表を中断してしまう。児童文学の世界では、戦後から約5年間は、「良心的」児童文学雑誌の隆盛期とされている。この隆盛期と、草田男が作品を発表した時期とほぼ重なることは単なる偶然ではない。その後、「良心的」児童文学雑誌は衰退し、代わっていわゆる大衆児童文学が台頭するからである。

この時期について、日本児童文学の概論には、次のような記載がある。二種類の概論から引用してみよう。

敗戦直後から数年間は、いわゆる「良心的」民主的児童雑誌の隆盛期で、児文協に結集した民主的児童文学者もこの「良心的」児童雑誌を舞台に創作活動を展開した。（中略）成人文学者の作品も多く掲載され、その成果が期待されたが、数年で衰退してしまうのである。<sup>13</sup>

広く文壇の作家や評論家に寄稿を求めたこともこれらの雑誌の大きな特徴で、営利を目的とせず、科学や社会に目をひらかせ民主的な世界

観を養おうとした点で、「良心的」児童雑誌と呼ばれている。

こうした児童雑誌隆盛の中から生まれた成果として特徴的なのは、まず社会風刺性の強いメルヘン風の作品群である。<sup>14</sup>

これらを見る限りにおいては、児童文学作家以外の作家たちの力を借りながら、良質な作品を活字に飢えた子どもたちに提供しようとする各社の真摯な姿勢が見受けられる。だが、実際のところ、それだけだったかといえば、議論の余地があるかと思われる。それは、藤田圭雄の「どんなつまらない雑誌にしても、こしらえればみんな売れるという情勢だったから、『赤とんぼ』なんか一番出た時に、ページ数は薄かったけれども、四万くらい出てますからね」<sup>15</sup>という表現に見られるように、作家たちの良心が実際の売り上げにつながったと考えられなくもないからである。しかし、この良心的児童雑誌も、引用にあるように、1949（昭和24）年から1951（昭和26）年の間に衰退してしまう。その同時期に、草田男はメルヘン創作を止めてしまうことになる。恐らく、良心的児童雑誌の衰退とともに、彼へのメルヘン創作の依頼も止まってしまったのではないかという推測が成り立つ。それが証拠に、実際後年メルヘン創作の意欲を見せたものの、それは形にならなかったからである。読者である子どもは、良心的児童雑誌よりも、その後台頭した「大衆的児童雑誌・漫画」に流れてしまったのである。無論その後も児童文学は更なる展開を見せるが、児童文学界の中では、絶えず「危機」という言葉が叫ばれるようになる。こうした児童文学の流れに加え、本業である俳句創作や、桑原武夫の『第二芸術論』を始めとした俳壇における論争に追われながら、新制大学の教授職を慌しくこなす毎日を送ることになり、児童文学から距離を置かざるを得なかったのではないかと考えられる。

## Ⅵ 草田男のメルヘン、童話観、子ども理解

『ビーバーの星』と『風船の使者』の両方の巻末には瀬田貞二の解説がある。彼の戦略については後述するが、その解説には草田男の童話観が記されている。

この童話観の根拠となるのが、草田男自身が童

話について言及したエッセイ『童話』である。これは、1948（昭和23）年から翌年にかけて自身が主宰する『萬緑』誌上において4回にわたって連載されたものである。<sup>16</sup>

第1章では、自分に戦後童話創作を依頼したのは『少国民の友』の編集長及川甚喜であった。極度に理想化された世界を想像したがストーリーが想起できない。おとぎ話のように動物の力を借りて筋立てしようとしても断念せざるを得なかった。

第2章では、自分の生活の中から第一に取り上げたいことを表現しようとするが、このやり方は俳句創作と何ら変わらないことに気づく。主題を据えて物語を創作するというところまで発展する。

第3章では、この共通性から、「童話とは其形式が散文文学であるにも拘わらず本質に於ては詩文学である。」という結論を導き出す。創作せずにはいられない衝動と要求とが迫ってきた時の、「一種独自の内的衝動」によって童話創作が可能になったとしている。

第4章では、宇野浩二が小川未明編の冒頭に「童話の世界を地上に出現せしめること、それが人類の究極の理想である」という言葉を、童話を詩と置き換えても何ら変わらない。

これらの内容から、草田男は俳句の才能とともに詩を童話と置き換えて物語を紡ぎあげていくという手法を採っていることがわかる。また、その作品がすべて人類究極の理想へと向かっていることから、対象となる子どもをただ「児童期にある存在」とせず、「これから育ちゆく存在」としてあるべき姿を問いかけていく方法を採用している。これは、未明童話に代表されるロマン主義的な作風であるということが出来る。

ちなみに、同時代にメルヘン創作について詠まれている作品を挙げる。

童話書くセルの父をばよじのぼる（1946）

下照る夏灯車童話を読む声あり（1948）

冬灯へ蜜蜂童話発想近からむ（1948）

冬空や腹案童話と万国旗（1952）

これらの作品から、メルヘンの対象である子どもたちの姿を句に詠んでいることや、メルヘン執筆を中断した後も創作への意欲は途絶えてい

なかったということがわかる。また、自分の子どものみならず、戦災孤児を読んだ作品も多く残っていることから、その子どもたちを究極の理想へと導きたいという願いがメルヘン創作にも反映されていると考えられる。

草田男の子ども理解、特に言語の発達段階をどの程度把握していたのであろうか。四人の子どもを授かった父親としての体験はもとより、七年制の成蹊高等学校教員として、現在では中学一年生の担任などを経験したことから、小中学校の子どもの育ちに関する理解は高かったと想像できる。

なぜなら、まずは1948（昭和23）年、国定教科書の4年生と6年生に入る俳句について、当時編集責任者であった石森延男から句の選択を依頼されているからである。また、同年出版された『やさしい短歌と俳句』で小学生向けの俳句入門を担当し、1955（昭和30）年には中学生、高等学校の生徒向けの入門書『文芸教室 新しい俳句の作り方』を上梓している。特に前者については、「超スピード」といった言葉を始め、擬態語を多用するなど、読者である子どもを念頭に置いた言葉遣いで表現している。<sup>17</sup> また、俳句という特殊文芸の世界にいかにして誘い実際に句作させるかといった工夫も随所に見られる。さらに、巻末には「父兄への言葉」があり、教科書との関わりから、子どもたちが学校で実際に授業時に行われるということを前提にして、この著作を通して保護者にも俳句理解を勧め、家庭内で補佐するよう呼びかけている。その後、1953（昭和28）年、全国教職員向けに発刊された文芸雑誌『文芸広場』の創刊号から俳句の選者となり、俳句指導者としての役割を果たしていたという事実もある。

こうした教育者としての草田男像から観れば、児童期のことばの発達段階に関しては熟知していたと考えて間違いない。

## Ⅶ 瀬田貞二の戦略

草田男は、戦前戦後創作されたメルヘン創作に対してある種の意欲を示していた。創作はあくまでも「依頼されて」ということであったが、先述した内容に加え、創作年表を見る限りにおいて、自らも意欲的に発表していたことは事実であろうと思われる。その意欲を弟子の誰よりも理解して



いた人物が余寧金之助、すなわち瀬田貞二であった。瀬田（1959）は、「草田男と童話と俳句」の中で、独自の宮沢賢治観を披露した上で、賢治作品と草田男作品の共通性について論じている。<sup>18</sup>独自の賢治観とは、賢治にとって自分の心象スケッチを詩や小説など、さまざまなジャンルで表現することが可能であり、特に読者を子どもに限定して創作したものが案外少なかった。それは、純粋な考え方をして純粋な書き方をしていくうちに童話という形式で表現せざるを得なかったからであるというものである。すなわち、賢治は読者を子どもに限定するというよりも、創作世界を表現する上で文芸ジャンル、表現形式としての童話を選択せざるを得なかった。この童話選択の必然性が草田男の童話創作と共通しているというのである。草田男は、自らの童話創作上の体験を「童話とは、その形式が散文文学であるにもかかわらず、本質においては詩文学である」と結論づけている。そこに至る経緯を説明した後、草田男自身から「余寧君、童話も、自分の志向がその筋にびつたり合つた時に、生まれて来るのですね。」という言葉聞いたという経験や、山本健吉が「草田男の本質はメルヘンの世界だ」という主張を展開しているということを紹介している。<sup>19</sup>

ここで、瀬田には草田男メルヘン・童話に関するある戦略があったということを明らかにしたい。まずは、その戦略の一端をうかがい知ることができる文章を引用する。

私はこのように賢治が童話を書く動機や必然性を私なりに推測したのだが、童話を書く動機や必然性がそのようなのは、賢治ひとりではなかった。やがて多くの人が中村草田男の童話を読むようになれば、同様のことを思うにちがいないと、私は思う。そして、草田男の童話も「日本のこれまでの童話とかかわりなく」例外的に、幸福にも詩の磁針が童話の極をさした場合であることをも、知ると思う。

この文章を発表した時期というのは、児童文学の危機が叫ばれ、いわゆる未明童話が早大童話会に批判され、ロマン主義の抒情的な作品よりも子どもに合った子どもの世界を描くことがスローガンに掲げられていた。児童文学の世界ではこの停滞感や閉塞感を打破しようと新たな道を模索し

ていた時期にあたる。平凡社『児童百科事典』などを始め、多くの童話創作や翻訳をてがけていた瀬田自身もこの渦中にあつたと思われる。だが、この革新運動はあくまでも童話作家による童話創作の運動であり、瀬田はその革新を門外漢（アウトサイダー）の参加によって遂行させようと考えていた。

一般にアウトサイダーに対して極端に酷で冷笑的か黙殺に出るのが、総じての児童文学者集団のくせであってか、何か、「民主的」でない縄張り根性を思わせるほどだ。もし、子どもに強い関心と同感を持つ文学者が、つまりアウトサイダーが多くなれば、その努力が児童文学に定着すれば、それは児童文学者の喜びであり、読者である子どもの幸福であるのではないか。現に、何といおうか、戦後のこの時期の収穫（子どもにとっての）は、すぐれた文学者の参加によるのだ。真に言いたいことを持った力量のある作家が、その力量のゆとりにおいて（苦闘でない、楽なのびのびとしたフォームで）子どもに語りかけることは、いつも児童文学の流れを更新してきた事実である。<sup>21</sup>

これは、戦争直後のアウトサイダーによる児童雑誌への寄稿における貢献を述べたものであるが、実際は当時の児童文学界へのアンチテーゼともいえる主張であった。つまり、内側すなわち児童文学作家同士の質的向上を図る方法と、外側すなわち児童文学作家以外の作家を入れることで新たな流れを作る方法とがあるとするれば、瀬田は後者の立場をとったわけである。これが瀬田の戦略の本質といってよい。

では、この戦略が具体的にどのようなものであったか。それが、『海狸』の童話化すなわち『ビーバーの星』の出版であるといえる。この出版については、先述した通り、当時の閉塞状況を憂っていた人々には喜ばれ、新聞各社の書評を賑わしたものの、児童文学作家からの評価はゼロに等しかった。それどころか、その作品に対する議論すら起らなかった。これがまさに、瀬田にしてみれば「縄張り根性」であつたということであろう。

こうした一連の動きがあまり拡大しなかったことは、作者自身に表現を全面的に改めさせた上での出版であつただけに瀬田にとっては不本意で

あったに違いない。草田男から出版記念祝賀会では更なる創作への意欲とも取れる発言があったが、このままではその火を消してしまうことにもなりかねない。

そこで、瀬田は今度は子どもを対象とした童話よりも、草田男のこれまでの創作全てを世に問うことにした。メルヘン集の解説を瀬田自らが行い、この著作を新聞各社に大々的に宣伝させることにより、その作品的価値の引き上げに成功した。草田男はすでに現代俳句協会幹事長、俳人協会初代会長として、俳壇からは押しも押されもせぬ存在であったため、その俳人がこのメルヘンを書いたということで話題性も十分に確保している。まさに、満を持してのメルヘン集発表であった。図書新聞に、同時期に出版された菊地重三郎の『空から来たテルテロ』とともに「素朴ですがすがしい二作 アウトサイダーの書いた児童文学」と題した書評がある。

状況を変革に導いていくものはいつの時代にも常にアウトサイダーの精神である。ここにとり上げた二人の作者は、児童文学畑ではない部外者であるが、そしてまさしく部外者故に色合いの差を新鮮な形で提出してくれた。インサイダーの疲弊が、何と魅力に乏しく恐ろしい沈滞に落ち込んでしまものか、この二つの作品の素朴さがそれを教えている。<sup>22</sup>

この評は、まさに瀬田の戦略を見事に言い当てたものであるということが出来る。こうした結果、草田男のメルヘン集は芸術選奨文部大臣賞を受賞するのである。ここまでは、瀬田の戦略が成功裏に終わったということが出来る。

だが、それ以降の評価はどうであったか。複数の児童文学事典を引くと、中村草田男が人物項目として出てくるものもあれば、瀬田貞二の項で紹介されているものもあり、全く紹介されていないものもある。これは、瀬田が思うような変革には至らなかったことを示している。

## VIII まとめ

草田男は、俳句創作の一方で、限定された期間ではあるが、童話を作り続けた成果がメルヘン集の高い評価につながった。特に戦後次々と発表された作品群は、戦争という悲惨な事実を写實的に

描くのではなく、童話というスタイルをとることでロマン主義的な作品に仕上がっている。それは、草田男が童話に詩形式との共通点を見出し、俳句として表現してきた自らの本質ともいえる「メルヘンの世界」を素直に表出するということであった。中でも『海狸』は読みやすく伝わりやすいという点で瀬田の目にとまり、童話化された。だが、それほど大きく取り上げられることもなければ評価されることもなかった。そこで、瀬田は草田男に『風船の使者』を出版させることで、メルヘンとしての大人からの評価を世に問うた。

児童文学作品としての『ビーバーの星』の評価は読者論の視点から考察すると、子どもの語彙や理解を明らかに超えており、難解なものであると考えられる。

だが、改めてこの作品を読む時、作者である草田男が人間の生き方や宿命について真正面から子どもに訴えかけている作品であることは認めざるを得ない。その際には、読み聞かせる大人の認識や知見が問われることになろうが、同時代人の高い評価もあり、それだけの価値があるということは確かであるということが分かった。

## <注>

- 1 菊池光彩波 1970「大人にも奨めたい『ビーバーの星』」『萬緑』昭和45年9月号 13
- 2 本来ならネイティブ・アメリカンと表記すべきだが、ここでは童話本文の言葉を引用した。
- 3 由良君美 1984「『海狸』攷」『萬緑』昭和59年9月号 7-12
- 4 1と同書
- 5 高杉一郎他 1978「『風船の使者』特集」『萬緑』昭和53年2月号 3-13
- 6 この『モヒカン族の最後』は、1826年に発表され、1900年代から繰り返し映画化されていたこともあり、日本にも戦前から紹介されている。出版物としては、1937（昭和12）年平原社語学部から、あるいは1948（昭和23）年新少国民社から児童用にも編集されていることもあり、執筆前あるいは執筆中に観るあるいは読んだ可能性が考えられる。これらはいずれも確たる根拠がないため、影響関係を立証することはできないが、少なくとも両者には共通した事項が確認できる。
- 7 市川由希子 2002「典型から原型へールイーズ・アードリックの戦略としての『語り』」西村頼男・喜納育江編著『ネイティブ・アメリカンの文学』ミネルヴァ書房 222
- 8 J・F・クーパー、足立康訳 1993『モヒカン族の最後』福音館書店 459-460



- 9 同書 389-390
- 10 西田良子 1980『現代日本児童文学論』 桜楓社 11-23
- 11 中村草田男 1969『ビーバーの星』福音館書店 解説
- 12 この思想統制とは、『草田男全集』の年譜によると、1943（昭和18）年に「高等教員再教育のため日本精神文化研究所に三か月通わされた。」とあるが、正式には国民精神文化研究所（通称、精研）と言い、通ったのは教員研究科であろうと推測される。同年11月には精研は国民練成所と合体して教学練成所となるからである。
- 13 日本児童文学学会編 1976『日本児童文学概論』 東京書籍 75
- 14 鳥越信編著 2001『はじめて学ぶ 日本児童文学史』 ミネルヴァ書房 297-298
- 15 瀬田貞二 1959「戦後の児童文学雑誌から」『新選日本児童文学3 現代編』小峰書店
- 16 初出は『萬緑』であるが、テキスト全集第8巻に4章の内容がまとめて掲載されている。
- 17 両者ともテキスト全集第6巻に掲載
- 18 瀬田貞二 1959「草田男と童話と俳句」『萬緑』昭和34年6月号 4-7
- 19 山本健吉 1978「草田男のメルヘンの世界」『萬緑』昭和53年5月号 4-5
- 20 瀬田貞二 1959「草田男と童話と俳句」『萬緑』昭和34年6月号 4
- 21 15と同書 46-49
- 22 15と同書

使用テキスト

中村草田男 1969『ビーバーの星』福音館書店  
 中村草田男 1977『風船の使者』みすず書房  
 中村草田男 1991『中村草田男全集』みすず書房

#### <引用文献・参考文献>

- 1) 飯島晴子 1974「中村草田男論」『俳句』23（8）pp. 120-135
- 2) 池上樵人 1970『「ビーバーの星」出版祝賀会記』『萬緑』昭和45年2月号pp. 4-5
- 3) 市川由希子「典型から原型ヘールイーズ・アードリックの戦略としての『語り』」西村頼男・喜納育江編著 2002『ネイティヴ・アメリカンの文学』ミネルヴァ書房
- 4) 大阪国際児童文学館編 1993『日本児童文学事典』大日本図書p. 48
- 5) 金子兜太 1985『わが戦後俳句史』岩波新書
- 6) 上條信山 2002『硯上の塵 - 信山自伝 -』展望社pp. 76-79
- 7) 菊池光彩波 1970「大人にも奨めたい『ビーバーの星』」『萬緑』昭和45年9月号pp. 13-14
- 8) 斎藤惇夫 2002『子どもと子どもの本に捧げた生涯 - 講演録 瀬田貞二先生について -』キッズメイト
- 9) 瀬田貞二 1959「草田男と童話と俳句」『萬緑』昭和34年6月号pp. 4-7
- 10) 瀬田貞二 1966「草田男童話を紹介します」『萬緑』昭和41年9月号pp. 132-136
- 11) 瀬田貞二 2009『子どもの本評論集』上・下 福音館書店
- 12) 高杉一郎他 1978「『風船の使者』特集」『萬緑』昭和53年2月号
- 13) 田島和生 2005『新興俳人の群像 「京大俳句」の光と影』思文閣出版
- 14) 鳥越信編著 2001『はじめて学ぶ 日本児童文学史』ミネルヴァ書房
- 15) 滑川道夫 1988『日本児童文学の軌跡』理論社
- 16) 西田良子 1980『現代日本児童文学論』 桜楓社
- 17) 日本児童文学者協会編 2007『現代児童文学論集』全5巻 日本図書センター
- 18) 日本児童文学学会編 1976『日本児童文学概論』 東京書籍
- 19) 根本正義 1984『昭和児童文学の研究』 高文堂出版社
- 20) 前田一男 1982「国民精神文化研究所の研究 - 戦時下教学刷新における『精研』の役割・機能について -」『日本の教育史学』第25号
- 21) 山本健吉 1978「草田男のメルヘンの世界」昭和53年5月号
- 22) 由良君美 1984「『海狸』攷」『萬緑』昭和59年9月号
- 23) 余寧金之助 1959「草田男と童話と俳句」『萬緑』昭和34年6月号
- 24) J・F・クーパー、足立康訳 1993『モヒカン族の最後』福音館書店

## 資料1

『海狸』と『ビーバーの星』対照表（下線は論者）

中村草田男『海狸』	中村草田男『ビーバーの星』
<p>アメリカ・インディアン——といつても、北地の、海岸からずつと遠のいた森林地帯に<u>居住してゐる種族</u>——の間に、太古のことですが、一種独特の言ひ伝へが<u>信念として代々受け継がれ</u>、又、それを<u>証明するやうな、照応的事実</u>の方も、次々と自然にあらはれつゝけてをりました。</p> <p>それは、かういふ<u>信念と事実</u>となのです。この種族中の誰かの家に、新らしく子供が生まれたとき、七日目の夜に、親はその子の<u>胞衣</u>を森林の奥へ携へいつて、地中へ埋め三日三晩だけ<u>その儘</u>にして置く。すると、その間にいろんな動物がその地点の上を偶然に横切るであらうが、一番最初に横切つた動物が、その子供の一生の一種の「守護神」になる——といふのです。</p> <p>（中略）</p> <p>兎に角、彼等北方のアメリカ・インディアンは、こんなわけで<u>個人的な好感などの一切事を超越して、天帝の意志の下に或る動物と一体にならなければなりません</u>でした。しかも、飽くまで限定されたその人とその動物との相互の能力の範囲内だけで。</p> <p>こゝで一言だけつけ加へて置ませう。<u>読者の中の齢の若い人が、若し次に私ののべる物語の内容を、永く記憶してゐて下さるならば——その人は、成人した後に、「宿命」といふ言葉にぶつかった際に、その言葉のひびきの中から、暗い単調な種類の音色を聞きとるだけでなく、他のいろいろの音色をも、亦同時にハッキリと聴きわたることが出来るかもしれないのです。</u></p> <p>しかし、ヲトラップだけは、納得のいかなさに首をかしげると同時に、強い不快の情にとらはれざるを得ませんでした。「<u>世間体だけに関心を持った何といふ、形式道徳なのだらう。自分及び他人の誠実に対する何といふ信念の希薄さだらう</u>」しかもゲプタはその後も、試験官たちの試験方法の打合せの会合の室へは、他の所用のためですが、しばしば出入りしてゐました。</p>	<p>むかし、あるアメリカ・インディアン——北方の、海岸からずつと遠のいた森林地帯に<u>住む</u>、ある種族——のあいだに、あるとくべつな言い伝えが代々受けつがれ、また、それを<u>正しくあかす事実も</u>、つぎつぎとあらわせていたことがありました。</p> <p>それは、こういう言い伝えでした。この種族のなかのだれかの家に、新しく子どもが生まれたとき、七日目の夜に、親はその子の<u>胞衣</u>を森林の奥へたずさえいつて、地中へうずめ、三日三晩だけ<u>そのまま</u>にして置く。すると、そのあいだにいろいろな動物がその地点の上をたまたま横切るであらうが、いちばんはじめに横切つた動物が、その子の一生の『守護神』になる——というのです。</p> <p>（中略）</p> <p>とにかく、かれら北方のアメリカ・インディアンは、こんなわけで<u>人ひとりのすききらいなどとはかかわりなく、天なる神の意志のもとに、ある動物と一体にならなければなりません</u>でした。しかも、あくまで、その人とその動物とのたがいの力のおよぶかぎりです。</p> <p>このつながりをわたしたちは、よく宿命と申します。けれどもわたしたちがよく耳をすますなら、『宿命』ということばのひびきから、<u>暗い重苦しい一色の音色</u>を聞きとるだけでなく、ほかのいろいろの音色をも、また同時にはつきりと聞きわたることができるかもしれないのです。</p> <p>しかしオトラップだけは、なっとくのいかなさに首をかしげるとともに、強い不快の情にとらわれないわけにはいきませんでした。〈<u>世間体をおもねったなんという形ばかりのふるまいだらう。自分とほかのみな</u>の誠実さを、どうして信じないのだらう。〉そのくせゲプタは、そののちも試験のうちあわせの会合のへやには、ほかの用でしばしば出入りをしていました。</p>

## 資料2

児童文学作品としての評価にも関連するが、『ビーバーの星』で送り仮名が施された箇所を列挙すると次のようになる。

森林地帯、種族、言い伝え、代々、胞衣(えな)、奥、三日三晩、横切る、守護神(まもりがみ)、五歳(さい)、誕生日、武装、大部分、表情、現われる、区別、自然、成長、人気(ひとけ)、空腹、進退、瞬間、羽音、両眼、夢中、貧弱、結びつき、大元(おおもと)、意志、信じる、最初、特定、代表、役、命、逆、全体、必要、応じる、呼ぶ、近づける、宿命、暗い、一色(ひといろ)、音色、以上、凶年、雨期、穀物野菜、枝葉(えだは)、鳥獣、逃げる、産卵、水量、漁(りょう)、立枯れ、食糧、問題、以外、短い、漁獵、獣肉、氷、丸太小屋、冬眠、持久戦、事件、不安、恐怖、変える、封じる、共同(きょうどう)、食糧倉(しょくりょうぐら)、荒らす、肉類、肉片、破壊力、屠る、物影、怒り、絶望、二十歳、独身、不幸、凶悪、裏、見張り、結果、確信、告げ知らせる、餓死線、縦、無力、柄、突く、穴、明かり、示す、氷上(ひょうじょう)、対岸、握り、端(はし)、居場所、姿、触れる、下枝(しずえ)、折れる、軽快、岸壁、一直線、一瞬、言語、巨大、労役、影絵、大樹、海底、大株、怒張、勇気、穂さき、氣息、遠目、川床(かわどこ)、腹部、微妙、頭部、展開、戦い、獣、息吹き、突進、凶年、若さ、加わる、腕前、跳躍、一種、魔力、成功、結晶、勢い、疾走、必至、消す、齒、魂、経験、問う、対岸、化身、渦巻く、調子、移住、先祖、地味一方、沈黙、印象、聖者、細面(ほそおもて)、厚さ、平均、一重(ひとえ)、中央、瞳、唇、弓、武技、一種、成人、方法、矢、的、難、試験官、不快、情(じょう)、世間体(せけんてい)、誠実、裁判、尾行、個人的感情、感嘆、労力、私する(わたくし)、最善、相談、秘密、借りる、目撃、通い路(かよいじ)、敏感、被害、半減、将来、依然、悪業、前置き、トーテム柱(ポール)、像、卑劣、汚物、部落、懸念、意識、忍ぶ、鯨油、腕木、相対(あいたい)、念、胸、殺す、無意味、防禦、相談、悲しげ、上手(かみて)、段、下手(しもて)、低地、距離、身軽、皮靴、背、帯、決然、急速、非常に、敷物、舌、侵入、背後、位置、有利、条件、反る、量、大小無数、川面(かわも)、氷塊、舟、追跡、

攻撃、悪寒、倍加、沈む、踏む、犠牲、一切、解氷、恩恵、墓、被害、感謝、健康、当然、生命(せいめい)、長老、世間、不明、真相、葬る、静かな

## 資料3

(『ビーバーの星』は論者が付加している)

1932(昭和7)年

5月 「愚かな林檎」

7月 「散紅葉」

9月 「藍色と桃色との夢」

10月 「夕寒い煙突—文字に依るムンクの絵の模写」

11月 「夜桜——池田の結婚」

1933(昭和8)年

4月 「風船の使者」

8月 「洪水」

1934(昭和9)年

5月 「茶菓」

1946(昭和21)年

4月 「ドラの薔薇」

11月 「梅雨晴れの像」

1948(昭和23)年

6月 「石臼を廻す船歌」

10月 「一雲雀」

1949(昭和24)年

1月 「磁石」

7月 「海狸」

1969(昭和44)年

10月 『ビーバーの星』

1977(昭和52)年

10月 『風船の使者』